

† 近代国化を支えた貿易商人の企み †

1549年、ヨーロッパから伝来したキリスト教が日本の統治に悪影響を及ぼすとし、徳川幕府はポルトガル船の来航を禁止する「鎖国令」を1639年に発布した(図1)。



図1. 鎖国令

鎖国体制はアメリカのペリー来航がキッカケとなる1854年の開国まで200年間に渡って続いた(図2)。



図2. ペリーによる黒船来航

19世紀に世界を席卷していたイギリス大英帝国は中国「清」から茶と陶磁器・絹を輸入、インドで栽培したアヘンを清へ輸出する“三角貿易”で莫大な利益を食っていた。

「三角貿易」とは、19世紀初頭、英国の東インド会社が独断的に行ったもので、イギリスが清に支払った“銀”を取り戻すため、植民地のインドから綿織物を買利益を得たが、清から“お茶”や“綿”を輸入するため“銀”が大量に流出したため、インドで麻薬の“アヘン”を栽培して清に密輸入し、清から“銀”を取り戻してイギリスの貿易赤字を大幅に減らした(図3)。



図3. 三角貿易

その結果、1840年に「アヘン戦争」(図4)が勃発、英国のジャージー・マセソン(図5) 商會がアヘン輸出の主役を担っていたが、清に大英帝国艦隊を展開させた。



図4. アヘン戦争



図5. J・マセソン

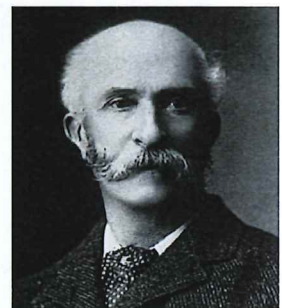


図6. T・グラバー

マセソン商會に入社したトーマス・ブレイク・グラバー(図6)は、21才のとき香港に派遣されたが、その後、日本担当になり貿易商の見習いとして、お茶や生糸の輸出と蒸気船や軍艦、武器の輸入販売をしていたが、日本語も堪能で人望もあったため独立し「グラバー商會」を立ち上げた。特に、アメリカの「南北戦争」(図7)で余った中古の武器を日本で販売し大儲けした。



図7. 南北戦争

その一方、日本で初めて蒸気機関を導入した近代的な修船施設の建設、蒸気機関を導入した洋式炭坑の開坑を行うなど、幕末から明治期における日本の急速な近代化に大きく貢献した。

1865年、日本初の蒸気機関車“アイアンデューク号”(図8)を走らせ、1866年、修船場“ソロバンドック”を建造し、修繕事業に貢献した(図9)。

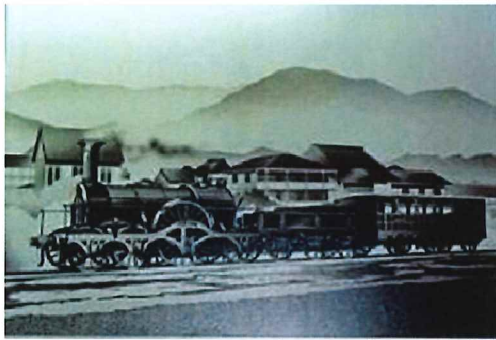


図8. 蒸気機関車“アイアンデューク号”

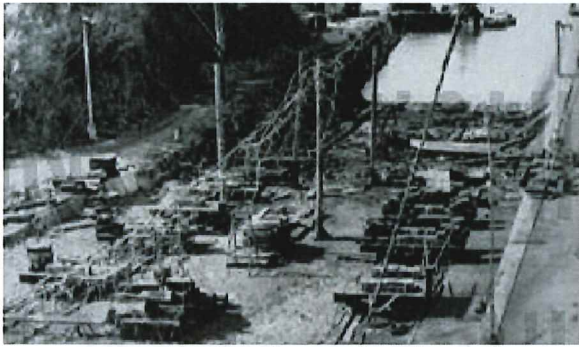


図9. 修船場“ソロバンドック”

土佐藩の坂本龍馬は、1865年、長崎を拠点に日本初の貿易商社「亀山社中」(図10)を設立し、江戸幕府を倒すため、薩摩藩と長州藩が結んだ政治的・軍事的な「薩長同盟」の設立に奔走した(図11)。

坂本龍馬が、29才の若さで起業できたのは、幅広い人脈との交流があったことと、グラバーを介して武器や船舶・軍備類を販売した資金で「薩長同盟」を支えたからであろう。



図10. 坂本龍馬と亀山社中

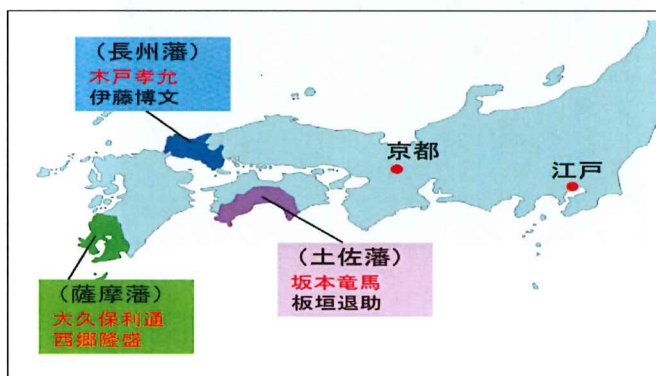


図11. 薩長同盟

幕末の開港に伴い、1868年、長崎へ寄港する外国の蒸気船の燃料として石炭需要が高まったことを受け、長崎沖の洋上に、グラバーと佐賀藩との共同によって本格的な海洋炭坑開発に着手し、日本初の蒸気機関による洋式堅杭「高島炭坑(三菱炭坑)」を建設、1日に300トンの出炭量があったが、1876年、海水の侵入により廃杭となった。

グラバーは「三菱」との交流が深まり、長崎造船所の顧問となり「グラバー邸」は長崎市に寄贈された(図12)。



図12. グラバー邸「グラバー園」

グラバーは長年にわたる日本滞在中で、日本人が“ビール好き”であることからビール産業界へ参入、1888年、「ジャパン・ブルワリー・カンパニー」を横浜に創設、ドイツ風ラガービールで、ラベルには古代中国の想像上の霊獣「麒麟」が描かれ、この霊獣の名に冠し「キリンビール」と銘打たれ人気を博した(図13)。



図13. 1888年のラベルと1889年のラベル

グラバーも坂本龍馬もフリーメイソンの会員であったため、日本は幕末から急速に近代化が進んだ。

「フリーメイソン」は、18世紀欧州の「石工」が起源の世界最大の秘密友愛結社で、高い道徳的品性を持ち社会奉仕や慈善活動に携わり、宗教を問わず世界中の会員数が600万人で、世界を影で操っているとも言われている(図14)。



図14. フリーメイソンのシンボルマーク